

守口 恭子, 谷川 良博 (著)

認知症のある人の生活と
作業療法 第3版

菅 沼 一 平

(京都橘大学, 作業療法士)



「その人らしさを見出す」——本書の冒頭で述べられているこの言葉は、作業療法の本質を端的に表している。本書で支援事例として紹介されている血管性認知症のVさんは、転倒後の治療的安静をきっかけに朝食をつくらなくなり、食欲も低下していた。デイサービスでも活気を失っていたが、作業療法士は、Vさんがデイサービスの食事から少量のご飯を持ち帰り、20年前に亡くなった夫の仏壇に供えていることに気づいた。Vさんは、転倒後に自力で炊飯ができなくなっても「ご飯を供える」という作業は何とか続けようとしていた。

生活機能障害（あるいは認知機能障害）が進んでも、Vさんのように、大切な人への愛情を表す行動の中に「その人らしさ」を垣間見ることができる。「趣味は▽▽である」、「〇〇が得意である」、「仕事は□□をしていた」というのも「その人らしさ」の一部ではあるが、たとえば、それができなくなったとしても、「誰か（あるいは自分）のために何かをしよう」という気持ちが言葉や行動に表れることこそが、「その人らしさ」ではないかと思う。言語化できない内

面からにじみ出る所作にも目を向け、「その人らしさ」を見出し、作業療法士は支援の糸口を探る。Vさんに話を戻すと、作業療法士は、「朝の炊飯ができればVさんの元氣も戻るのではないか」と考え、炊飯器のスイッチ横に「△△さん（夫の名前）に、ご飯を供える」という貼り紙をした。その後、Vさんはホームヘルパーの手を借りながら、炊飯器のスイッチを押す作業が習慣化され、炊きあがったご飯を仏壇に供えたあとに、自身の朝食もとるようになった。

本書は、Vさん以外にも、認知症のある人々に対する作業療法について、多くの事例を紹介している。その中で、もう一つの重要なポイントは、「認知症のある人の残存能力は、周囲との関係性の中で発揮される」という点である。認知症のある人は周囲の環境から影響を受けやすく、心理面も動揺しやすい。本書では「認知症のある人が、周囲との関係性をどのように捉え、どのような世界に生きているのか」という認知症の人の内側からみた視点を多角的に解釈しており、適切かつ具体的な環境調整の方法を示している。また、介入に至る道筋や根拠も明確で示

唆に富む内容となっている。近年は、認知症のある「人」を理解し、行動・心理症状の背景や環境要因をひもとき、適切なケアや治療につなげていくことが重要視されている。本書は、作業療法の技術を生かしたアプローチを通じて、この課題に対する一つの手がかりを提示している。

事例だけではなく、高齢期の特性、認知症の疾患特性、評価尺度の紹介、観察のポイントも網羅している。これらの内容は先行研究や文献を精査したうえで整理されており、事例と照らし合わせながら医学的な知識を深められる構成となっている点も本書の魅力である。加えて、家族支援における課題にも言及し、家族介護者が直面する負担や葛藤に対する理解を深める内容が含まれている。作業療法士だけでなく、介護や医療、福祉に携わる幅広い職種の人々にとっても、重要な示唆を得ることができる一冊であり、支援者自身のかかわり方を見直し、認知症のある人の尊厳を守るための方法を学ぶうえでも、有益な書籍である。

B5判 280頁 3,500円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357